

第2章 武士の活躍と信仰



鞆淵の惣



時代区分	旧石器・縄文・弥生時代
	古墳時代
	飛鳥・奈良・平安時代
	鎌倉・室町時代
	戦国・安土桃山時代
	江戸時代
	明治・大正・昭和(戦前)時代 昭和(戦後)・平成時代

鞆淵動乱と八人御百姓

鎌倉時代の終わりころから、荘園や村では、惣と呼ばれる農民たちの自治的な組織が作られ、生活や生産、祭礼などに関わるさまざまな取決めが、住民たち自身により決められていくようになりました。中でも鞆淵荘の惣では、高野山や鞆淵氏一族との間で「鞆淵動乱」と呼ばれる激しい闘いを、繰り広げたことでよく知られています。

鎌倉時代の終わりから室町時代にかけて、鞆淵荘には2つの勢力が存在していました。ひとつは、荘園領主であった石清水八幡宮に奉仕する神人と呼ばれる特権集団を中心にした勢力で、石清水八幡宮から送られてきた神輿を心の拠り所とし、鞆淵荘内で最大規模の用水路を開発するなど、水田開発にも積極的に取り組んでいました。一方、もうひとつの勢力は、後に鞆淵氏を名乗る武士の一族を中心に、それに従う農民たちをも含み込んだ勢力で、鞆淵氏の本拠地周辺で綿や苧麻の栽培などに取り組んでいました。

鞆淵氏を中心とする勢力は、南北朝時代に入るところから急速に力を伸ばしはじめ、同じころ、鞆淵荘の



国宝の神輿（鞆淵八幡神社蔵）

新しい荘園領主となった高野山と協力して、検注と呼ばれる土地調査を行うことによって年貢徴収を強化しようとした。これに対し、古くから鞆淵荘で生活を営んできた神人を中心とした勢力は、石清水八幡宮領時代の年貢額以上の納入には応じない姿勢を貫き、「八人御百姓」と呼ばれるリーダーたちを中心に激しく反発しました。これが鞆淵動乱です。高野山はこの「八人御百姓」を動乱の首謀者と認定し、処罰するためにその身柄を拘束しましたが、神人たちは惣のために勇敢に戦い、また日ごろから人望もあつかった彼ら八人の身柄を取り戻すため、巨額の身代金を支払って彼らを解放させたのです。結局、高野山は、彼ら神人勢力の主張を認め、鞆淵荘につかの間の平和がおとずれました。

鞆淵氏と高野山

鞆淵動乱がおさまると、鞆淵氏は紀伊国の守護である畠山氏の家臣としての活動が多くなり、次第に高

野山との関係も悪くなっていきました。高野山は、
 鞆淵氏を通じて守護からかけられる夫役などの税
 が、鞆淵荘の農民たちを苦しめていると判断し、
 1424（応永31）年、もとの神人勢力を中心とする
 農民たちが一斉に荘内を逃散したことを受けて、鞆
 淵範景の追放を決定しました。

しかし、追放の決定を受けた後も、鞆淵範景は何
 度も鞆淵荘内に入出入りしていたばかりでなく、その
 後も、高野山に対し綿・苧麻の納入を請け負うなど、
 鞆淵荘内で一定の地位を保ち続けます。高野山に
 とっても、鞆淵荘の円滑な支配のためには、地域社
 会に深く根を下ろした鞆淵氏の力は不可欠のもの
 になっていました。鞆淵の惣は、鞆淵動乱とその後の
 逃散事件を経て、新たな領主である高野山ではなく、
 地元で深く根を下ろした鞆淵氏やその配下の人々と
 共存する道を選んだのです。現在でも鞆淵氏の城跡
 に祀られている神社の祭りが、毎年4月に静かに続
 けられています。



石清水八幡宮によって開発されたと考えられる用水路



鞆淵惣荘置文（鞆淵八幡神社蔵）



わかやまの知識



【粉河荘東村の名付け帳】

紀の川市東野にある若一王子神社では、毎年、正月になると、その前年、氏子たちの家に生まれた男子の名前を帳面に記入していく「名付け」と呼ばれる伝統行事が行われています。この帳面のことを「名付け帳」と呼び、1478（文明10）年以来、現在まで絶えることなく書き継がれたものが長大な巻物となって残されています。名付け帳は、室町時代の惣を実質的に運営していた宮座の実態を知る貴重な史料で、その他の中世の古文書とともに黒箱と呼ばれる木箱に収納されて伝えられてきました。現在では、国の重要有形民俗文化財となっています。

* 1 荘園領主や武士の支配に反発して居住地を離れ、年貢を納めないこと。